

『境界を越えて——比較文明学の現在』第23号をお届けする。

歴史的なパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症は、発生から3年以上経ってなお、エンデミックに移行する気配を見せぬまま第8波を迎えつつある。マスクや消毒剤の風景が日常と化すなか、大学でも感染症との「共存」が模索されてきた。今号の交流会記録や、全体授業での切磋琢磨を経て上梓された院生諸君の書評には、ようやく再開された対面授業や研究交流会の成果が反映されている。

陣野俊史氏への巻頭インタビューでは、文芸評論から音楽批評、フットボール論、小説実作と、ジャンルを超え、批評と実作の境界を超え、国民言語の枠組みを超えてアフリカ大陸やカリブ海域に広がる批評の現場を語っていただいた。災禍の中、精神の弾力性を失いがちな今こそ、目線の低い声を聞くことを批評の原点におく陣野氏の批評活動のダイナミズムを堪能してほしい。

目線の低い声を聞くためには、有象無象が混沌とした現場に留まり考えつづける強靱な思考が必要とされる。伊藤順之介氏の友友良英氏へのインタビューからも、同じ思考の構えが伝わってくる。聞き心地の良い概念や出来合いの言葉で上面を整えた表現ではなく、「そうじゃないところ」に向かおうとする友友氏の思考は、人文学を志す者の原点でもあるはずだ。

今回は北野亮太郎氏の研究ノート1本のみ掲載となったが、掲載されなかった投稿者もぜひ査読者のコメントを参考に改稿して次に備えてほしい。なお、次回からは持ち込み・郵送に加えてメールでの投稿が可能になったので、他の会員もこの機会を利用してほしい。今号にはこの他、渡名喜庸哲氏・三宅萌氏のシンポジウム報告と拙稿が収録された。

段取りの悪さもあいまって、編集とデザインを御担当いただいた深澤晃平氏・長田年伸氏にはご負担をかけてしまったが、お二人の迅速な仕事のおかげで無事日の目を見ることができた。この場を借りて深謝したい。

2023年2月
林みどり